■続・らくだ日記（八十七）　佐怒賀正美■

妻と浅蜊は厨に泣きぬ明やすし　石原八束

（昭和三十四年作・句集『空の渚』所収・三雲書店刊）

前回に引き続き第三句集『空の渚』から。実は、以前「らくだ日記」の時に、この句について次のように評した。

≪八束の代表句で、愛唱している人も多いかもしれない。私は、「妻と浅蜊」の組み合わせには惹かれるが、「厨」は少々常套的かと思うし、「明やすし」は舞台を作りすぎてしまっていると思う。しかしながら、この句を読むたびに、そのように感じるのは、私自身が平和で豊かな時代に馴れて生活しているからではないかとも反問してみる。いったい、八束は何を感じてこの句を詠んだのだろう。

この句の面白さを一つだけ言えば、それは、妻と浅蜊の悲しみの出口が異なることだ。妻の方は、泣き止めて再び一日の生活へとけなげに立ち向かう。浅蜊の方は、泣いた後に待っているのは食べられてしまう運命。徹夜をした翌朝、早々と厨に立っている妻を見て、その両方の悲哀の内容に思いを馳せたのだろうか。変といえば、たしかにへんな句だが、戦後のつつましい生活感が伝わってきて、私は好きな句。現代のシステムキッチンにはない楚々とした味わいが感じられる。≫

いま読み直すと、いちばん大事な点を書き落していたかと思う。それは時代的な女性の立場の弱さである。一般的には、「厨」という語からは、現代の「キッチン」にはない、「楚々とした味わい」というよりも、薄暗い（もっと昔ならば土間に通じる）炊事の空間を感じ取るべきなのだろう。「厨」は家の中で女性の仕切れる空間でもあったが、それは古い社会体制の中で女性が暗黙の内に「任されてしまった」場所でもある。昔の古い木造平屋ならば、冬にはガラス窓が風に鳴り、隙間風なども入ってきた時代だ。日々の厳しい妻の役割と状況に耐えながら夫に見えぬように一人忍んで泣くのも、この「厨」であったのだろう。その場面を八束は見てしまった。それをペーソスを誘うかのような句に成しているが、現代ではこんな醒めた書き方はできないかもしれない。

それはそうとして、いまの恵まれた若いシステムキッチン世代に、この「厨」の語が醸し出す翳りや闇の奥行きがどのくらい見えたり感じたりできるだろうか。「蚊帳」と同じように「厨」も死語になりつつある。これらも、私自身にとって郷愁めいて浮き上がってくるようになってきた。

■続・らくだ日記（八十六）■

花ふぶく荒波島の納戸神（なんどがみ）　石原八束

（昭和三十四年作・句集『空の渚』所収・三雲書店刊）

第三句集『空の渚』に移ろう。これは第三句集ながら、三好達治先生のご多忙な事情の中で第二句集と発行順序が逆になってしまった珍しい句集である。もっとも、私自身の第一句集と第二句集も石原八束先生の同様なご事情で、発行順序が逆になった経緯がある。そのとき先生は「順序が逆になることはたまにありますよ」と確信をもってお答えになったので、妙に納得してしまった記憶がある。今年は元旦の机に向かってこんな感懐にしばし耽っている。

ところで、この句集『空の渚』の序詩は三好達治作。何度読んでも私は何よりも日本語の美しい姿と調べに惹き込まれて、しめやかでひろびろとした心象風景に飽きることがない。すこし長いが新年なのでお許しをいただこう。

空のなぎさ　　三好　達治

いづこよ遠く来りし旅人は
冬枯れし梢のもとにいこひたり
空のなぎさにさしかはす
梢のすゑはしなめきて
煙らひしなひさやさやにささやくこゑす
仰ぎ見つかつはきく遠き音づれ
落葉つみ落葉はつみて
あたたかき日ざしのうへに
はやここに角ぐむものはむきむきに
おのがじし彼らが堅き包みものときほどくなる
路のくま樹下石上に昼の風歩みとどまり
旅人なればおのづから組みし小指にまつはりぬ
かくありて今日のゆくてをささんとす小指のすゑに

さて、冒頭の句に話を戻そう。昭和三十四年、八束は唐津、有田、中津、柳川、平戸、諫早など九州を吟行している。その中の一句で、平戸島での作と思われる。この「納戸神」は、「隠れ切支丹の納戸に祀られた聖画像など」。厳しい自然ながら花ふぶく力強さの裡に祀られている納戸神は、隠れ切支丹の心象風景に相応しいかとも思う。四百年も昔の風景がいまでも眼前にありありと見えてくる。